二〇二二年一〇月二九日

亡き父の畑仕舞す帰郷かな　なつき
病窓へとどく運動会の声　む　べ
コロナ禍の吟行に秋惜しみけり　こすもす
走り根に枕ならべし木の実かな　ぽんこ
錦繡や火口湖目指す尾根の道　わかば
からと音して翻る落葉かな　わかば
注連縄の古し大磐小鳥来る　ぽんこ
行雲を追ふ母の目の秋思かな　素　秀
紫に暮れ行く山の秋惜しむ　はく子
喬木のセコイアいまし黄落期　こすもす
太梁の櫓を抜くる秋の風　なつき
点滴を終へし病窓黄落期　む　べ
すがれ虫残念石のうしろより　かかし
言はでものその一言のうそ寒し　はく子
月白に屋根の影濃き倉庫街　素　秀
トロッコの車窓過ぎゆく芒かな　宏　虎

毎週句会秀句・みのる選・二〇二二年一〇月三〇日